

「肉用牛放牧の手引き（改訂版）」の刊行にあたって

昔は牛の放牧と言えば畜舎周辺に有刺鉄線など固定式の施設を用いて行う放牧が主流であったが、最近では電気牧柵と呼ばれる低コストで手軽な放牧施設が開発され、放牧場所を自由に移動していく移動放牧が全国的に広まり、耕作放棄地等の管理に牛を活用した放牧が大きな成果を収めている。

農地や耕作放棄地で牛を放牧することにより牛は野草を食べ「舌草刈り」を行ってくれる。当然、人が野草を刈り取る手間暇、草刈り機の燃料代などが省け、農地や耕作放棄地の管理が楽になり、農地保全と牛の飼養管理の省力化が一挙に図れ、荒廃地の軽減でイノシシの潜伏場所を減らし、繁殖牛生産の省力化、飼料代の抑制、肉用牛生産による所得確保、景観保全、竹林の拡大防止（牛はタケノコやササが大好物）、また、取組によっては、児童・生徒とのふれあいによる学習効果や住民の癒しまで、幅広い効果が期待されている。

さらには、地域資源の活用、資源循環型農業、ひいては食料自給率の向上にも一役買うまさに「一石数鳥」の効果が実証されています。

このため、前回作成した「肉用牛放牧の手引き」（20年12月）が全国から多くの畜産関係者から問い合わせがよせられたため、今回さらに内容を拡充し、数多くの写真とコンパクトな文章にまとめ、とても読みやすく解説した改訂版を作成しましたので、これから放牧に取り組む方への入門書として活用していただければ幸いです。

最後に、本手引きの作成にあたって、優良事例や貴重な写真などを提供していただいた各府県の関係者の方々や、「放牧の基礎知識編」を専門家の立場から気合いをいれて編集・執筆していただいた滋賀県畜産技術振興センターの藤田雅彦氏に、心から感謝し、御礼申し上げます。

平成21年3月

近畿地域飼料増産行動会議
(事務局：近畿農政局畜産課)

写真：海見える牧場

京都府畜産技術センター醍醐高原牧場（京丹後市）

